

# 北海道アイヌ口承文芸 「カラス神の人さらい子育て」の西進

安田 千夏

はじめに

身近な野鳥カラスは、北海道アイヌの口承文芸ではどのような存在として描かれているのであろうか。人から見て最も身近な部類の野鳥であるうえに「鳴き声が明確」など、口承文芸に取り上げられやすい特徴を有していることが要因かも知れないが、他の鳥と比較しても多様である。その性格を端的に説明するのは、日本神話や民話の多様さに負けず劣らず難しい。しかしアイヌ文化では例えコミカルな役回りをしていても、その理由で神の座から除外されることはなく、他の生物神がそうであるように、神であるという点は常に一貫している。カラスが「神の従者」という位置づけで描かれているアイヌの物語があるとしたら、それは本来の世界観に何らかの手が加えられていると考えた方がいい。そしてアイヌ口承文芸でそうした多様な性格を持つカラスの一面を、ひとつの伝承類型を比較分析する中で明らかにすることが本稿の目的である。

## 1. アイヌ文化の「カラス」

まずは前提として、日本文化とアイヌ文化のカラスを比較してみることにしたい。まずは両文化ともに基本種は身近な留鳥のハシブトガラス、ハシボソガラスの二種である。

日本文化では基本種の他に、種の問題から離れてカワガラス、ウミガラス、ホシガラスなど「高山、河川、海浜などの各領域にいるカラス的な存在」にカラスの名を付しているが、アイヌ文化ではこうした名付けの特徴は見られず、あくまでも「全身が黒くてカーカー鳴く」存在のみをカラスと呼んでいる。従って黒くないカワガラスやウミガラス、そしてカラス科のホシガラス、コクマルガラス<sup>(1)</sup>、ニシコクマルガラスなどはカラスに含まれず、それらを除外した結果、基本2種に冬鳥ワタリガラス、ミヤマガラスを加えた4種を、アイヌ文化におけるカラスと考えておくこととした。

ちなみにアイヌ語名「Citeskop」は和名「ヨガラス<sup>(2)</sup>」とされ、「ヨガラスが鳴きながら飛んで行った方向で人が死ぬ」という日本文化と共通する伝承の採録例がある。どちらからどちらに伝わった伝承であるかという点はひとまず置き、これは両文化共に、時に夜鳴くことがあるというカラス類の一般的な習性にそうした種があるかのように名が付されたものであり、種名は特定されない。

## 2. カラス口承文芸の類型化

本編に入る前に、北海道の神謡と散文説話中に見られるカラスが物語の中心となる伝承を類型化することとした。口承文芸に登場する場合の名称は基本カラスであり、種名で語られるケースはそう多くないので、ここでもカラスの呼称を用いることとする。

### 2-1. 神謡にみられる類型

#### ◆「酒樽失敗」

カケスが神々の酒宴の席で歌い舞いながら外に出て、どんぐりをくわえてきて酒樽に入ると神々は喜んだ。それをまねしてカラスが歌い舞いながら外に出て、糞のかたまりをくわえて来て酒樽に入れた。神々は激怒し、カラスはひどい目に遭わされた。

#### ◆「居眠り失敗」

フクロウが人間達に談判をしたいものだと嘆き、その内容を伝える鳥を探していた。カラスが我こそはと名乗り出てフクロウの長い話を聞いていたが、不敬にも居眠りをしたために叩き殺してしまった。次に名乗り出たミソサザイなど他の鳥の神は最後まで聴き終え、人間のところに飛んで行って無事に役目を果たした。

#### ◆「会話」

山のカラスと浜のカラスが出会い、人間の言葉で噂話をする。それを聞いたのをきっかけにして人間側が行動を起こすというもの。単体のカラスと人間の会話という例もある。散文説話にも同類型あり。

### 2-2. 散文説話にみられる類型

#### ◆「会話」

山のカラスと浜のカラスが出会い、人間の言葉で噂話をする。それを聞いたのをきっかけにして人間側が行動を起こすというもの。単体のカラスと人間の会話という例もある。神謡にも同類型あり。

#### ◆「逃走指示」

主人公が悪神などから逃げる途中で、カラスが鳴いて逃走経路について助言をしたために無事に逃げる事ができる。いわゆるベナンベバナンベ譚にも同類型が見られる。

#### ◆「暗示」

伝承中、カラスが重要な働きをして結果的に主人公を助けるが、カラス側の意思は物語中に描かれないので、謎めいた存在という印象が強く残る。

#### ◆「人助けと祭祀由来」

カラスが通常とは異なる特異な行動をして、悪神にかどわかされた主人公を助け、無事に家族の元に帰らせるという話。助けたことをカラス自身が主人公に告げ、それが縁となっ

て以来主人公の家系ではカラス神を祭るようになったという由来を語る。

#### ◆「人との婚姻」

カラスが人の姿となり、人と婚姻関係を結ぼうとするが、拒まれて未遂に終わる。生物神と人の婚姻譚はアイヌ口承文芸でしばしば見られるが、婚姻関係が成立する場合としない場合がある。

#### ◆「人さらい子育て」

カラスとその子が人の姿となり、人間の子供を交換して育てる。最後は素性がばれ、カラスの姿に戻るという展開。伝承にもよるが、狡猾さやコメディ要素が目立つ展開となっている。このパターンについての詳細は後述する。

### 2-3. その他の類型

#### ◆「生物の起源、由来」

「カラスはなぜ黒くなったのか」「なぜこのような行動をするのか」などの由来を説明する内容。

神が主人公となる神謡では、カラス神は失敗をするコミカルな役割で描かれるものが主となるが、人間が主人公となる散文説話においては、重要な役割を果たすものが多くみられるという傾向があった。

## 3. 問題の所在

カラス神は多くの類型で、人の姿に変身しないカラスの姿のままで人と言葉を交わす。アイヌ口承文芸の中ではカラスのみならず、生物神が生物の姿のままで人間と言葉を交わす例が少なからずある。はっきりとした人間の言葉で話す例もあれば、よく耳を澄ますと生物の羽音や吐息が人の言葉に聞こえたという例もあり、また樹木神であれば枝がこすれあう音が人の言葉に聞こえるという場合もある。生物が発話するということがさしたる驚きの対象とならないのは多くの民族にみられ、日本民話については、小澤 1994 で次のように説明されている。

もし伝説のなかでならば、動物が人間に対して友好的であろうが敵対的であろうが、こうして人間の前に現われて、人間と同じことばをしゃべれば、そのこと自体に伝説としての興味が向き、そのこと自体が、伝説が伝えるべき奇跡的事件となるはずである。ところが昔話のなかでは、人間と人間でないものとの間に断絶はなく、自然や動物や超自然的な存在が人間のことばをしゃべっても、そのこと自体は驚きの対象とされないのである。

日本民話で生物を「特別に超自然的な、魔的なものとは受けとっていないし、神聖なものとも受け取っていない（小澤1994）」のとは、アイヌ文化におけるそれは根本的な違いがある。また西洋の民話にみられるような「生物の正体は魔法で姿を変えられた人間」ということでもない。冒頭で述べた通りアイヌ文化ではどんな場合でも生物は神であり、それが時には魔的なものに変化する場合もある。そして神の国で人間と同じ姿をしている<sup>(3)</sup>とされる神が、人間界で時に人間の言葉を発したとしても、それはさしたる驚きの対象ではなく「そういうこともあるか」という程度の認識なのかも知れない。少なくともそのように説明することが可能である。例え表現が類似していても、それぞれの民族の世界観に基づいた根本的な違いを認識しておく必要があるということになるだろう。そしてアイヌ口承文芸では、往々にして人（語り手）の興味は、神と関わることとなったために生じる日常の変化に向く。例えば異類婚姻譚で、神と結婚することにより通常の間人同士の婚姻とは儀礼の手順が異なることを説明するくだりなどがそれにあたる<sup>(4)</sup>。アイヌ文化において生物と人の距離感を考えることは神と人の距離感を考えることにも通じ、また異類婚姻譚にとどまらず「神が人間に子を授ける」などのバリエーションも踏まえつつ自然現象など無生物の神々との関係も含め、考えていくべき問題が山積しているというのが現状である。

時にアイヌ文化と日本民話に良く似たモチーフがあった場合、その世界観を手がかりにしてどちらにルーツがあるかが判明する場合がある。以下は日本民話とアイヌ口承文芸に共通する「生物の起源、由来」類型にみる例である。

アイヌ口承文芸「梟の縫師」『アイヌ古事風土記資料』吉田巖 帯広市教育委員会 1957年  
伝承地域 十勝／伝承者 不明／採録年月日 1912年2月20日／公開形態 梗概<sup>(4)</sup>

昔、梟が何鳥のでも、着物を裁縫してやる身分でした。啄木鳥の着物を梟に頼みました。啄木鳥の言うのには、「遅くてもよいから、綺麗に拵えてくれ」と頼みまして、模様を綺麗に、縫込んだので、それで啄木鳥の着物は、はでな縫模様をおいた着物を着てるのである。鳥は梟に頼むとやがて、梟に、「早く早く早く」と、せきたてるので、それで梟は、いそいで黒無地の着物ばかり、拵えてやったので、かように、鳥の着物は黒いので、それを腹黒く思って、真昼間、梟に向って、鳥があうと、それからのち、いじめるのである。で、梟が困りぬいとる。……という話。

日本民話「ふくろう紺屋」『日本昔話ハンドブック』稲田浩二、稲田和子 三省堂 2010年  
鳥が、ふくろうの紺屋（染めもの屋）に、珍しい色に染めてくれ、と頼むが、鳥がなかなか満足しないために、色々染め直しているうちに真っ黒になってしまう。怒った鳥は、ふくろうを追い回し、ふくろうは昼間は隠れ、夜だけ出歩くようになる。

両者は構成が酷似しているが、下線部分の鳥神の中でも位が高いとされるフクロウ神が他の鳥の着物の仕立てをするという点、そして格下のカラスに追いかけることがフクロウの夜行性由来という点をアイヌ文化の世界観に照らすと違和感がある。これはそうした違和感のない側、つまり日本民話の「ふくろう紺屋」にルーツがあり、どこかの段階でアイヌ文化に伝わったと考えるのが妥当であろう<sup>6)</sup>。

本稿では「生物と人との関わり」をモチーフとする伝承の中でも特にカラス神の「人さらい子育て」という散文説話の類型をテーマとする。そこでのカラスは人の姿に変身し、不心得な神は人を襲うこともあれば欺いてもくるという、アイヌ文化の神の多面性を見ることができる。そこでのカラス神は狡猾で、滑稽で、悲惨な結末が待っているのであるが、やがてそれらは伝承の過程である形に変化していったように見えるので、次項ではそれを詳しく見ていくこととする。

#### 4. 「人さらい子育て」の伝承経路

散文説話の類型にあげた「人さらい子育て」を本稿での主な比較分析対象とし、そこに属する伝承を年代順に詳しく見ていくこととしたい。

##### 4-1. 1910年代の記録

この類型の最も古い年代の記録は、採録年月日1910年6月7日、十勝地方（伏古別）で記録された梗概「イトウ夫とカラス妻」ということになるだろう。梗概は次のようになる。

人間の男の子が大人の女性に養われていた。女性はいつもオオウバユリ団子を山盛りに盛って外へ出ていき、すっかり空になったものを持ち帰ってくるのを男の子は不思議に思っていた。

ある時男の子が女性の後をつけていきこっそり見ていると、川の中からイトウが出てきて、女性から団子をもらって食べていた。男の子が何食わぬ顔で家に戻ると、女性が帰ってきて山に出かけて行った。

男の子がひとりで川へ行き「夫よ」とイトウを呼ぶと姿を現したので、銚で突いてとり、煮て食べてしまった。女性が帰ってきたのでイトウの頭と尾を差し出すと、女性は血相を変えて飛び出して行った。

男の子が後をつけていくと、山の中の一軒家で女性がイトウの子を煮ていた。女性が男の子を罵倒したが、その後トイレに行った隙に寝かしてあった子を串に刺して焼いた。戻ってそれを見た女性は男の子をさらに罵倒して飛び出して行った。

男の子はイトウの子を食べてからさらに女性を追いかけて、さらに山奥にいくとまた家が

あった。そこに男の子が入ると、若い男が入って来て、女性と二人で男の子を罵倒し「大古鳥」になって飛びかかって来たが、男の子が殴りつけると窓から逃げて行った。

「大古鳥」が人間に化けて男の子をさらって育て、食べようとしていたのを見破ったという話。<sup>(7)</sup>

#### 4-2. 1960年代以降の記録と反復句

1960年代には、「イトウ夫とカラス妻」と同じ十勝地方で、「人さらい子育て」類型中に印象的な反復句が生まれ、各地に伝わっていった様子を見てとることができる。以下採録年順に列記し、反復句部分には下線を付す。

「鴉と親子」更科 1963 / 伝承地域 十勝芽室太 / 伝承者 勝川ウサカラベ / 採録年月日 不明 / 公開形態 梗概

山の中で主人公である人間の男の子が母（らしき女性）と暮らしていた。あるときその女性は焚き火を吹きながら次のような歌を歌っていた。

「鳥のせがれが プー／あんまり狩が上手で プー／皮はぎばかりさせられて プー／手が凍るようにつめたい プー／口も思うように動かない プー」

主人公が何を言っているのだろうと思ひながら、川下にある家を訪ねて行って中をのぞくと、人間の女性と一緒にカラスの子供がいて、このような歌を歌っていた。

「お母さん ハー／しゃもじ頂戴 ハー／油が上に浮いたから ハー／汁をすくって頂戴 ハー」

女性は「私はお母さんじゃない」と言ってカラスを叩いた。主人公はこの人こそが母親だと気づき、母子は再会して喜び合った。母が言うには「私の姉がカラスの子を置いていき、私の子を連れ去ってしまった」ということだった。

「カラスと赤ん坊」萱野 1988 / 伝承地域 沙流地方 / 伝承者 鍋沢さだ / 採録年月日 1961年9月30日 / 公開形態 梗概

一軒だけの小さな家で主人公である人間の男の子が母（らしき女性）と暮らしていた。大切にされて暮らしていたが、ある日猟から帰ってきて家の中を覗くと母はいろりの火を吹きながら次のような歌を歌っていた。

「パシクルタサッ プー／イソンカシバ プー／チナナイネ プー／チテケカ プー／オケムヤラケ プー（カラスと取り替えた者 プー、狩りが上手すぎて プー、私は皮張りばかり プー、私の手が プー、針で破れ プー）」

主人公は母と思っていたのはカラスだと気づき、腹が立ってそいつの髪をつかんで地面に叩きつけた。そいつがいうのには「神が罰を与えて秘密を歌にして口に出してしまった。

あなたの母がオオウバユリ掘りをしている間にシンタ（ゆりかご）の中にいるあなたと自分の子をすり替えてきて今まで大切に育てていたのだ」そして一羽の年寄りガラスになったので、2度3度地面に叩きつけると死んでしまった。眠るとも思わずにいたのに眠ってしまうと、夢には母と思っていた女が出てきて「悪かった。勝手なようだが木幣をひとつ供えてくれないか。それを持って神の国に帰り、あなたが幸せに暮らすように守るので」というので、腹を立てながらもそのようにしてやった。その後主人公は大きな村に行き、本当の家族と再会した。家族はカラスと自分の子を取り替えられたことに気づき、カラスの子を殺して本当の子を探したが今までわからなかったという。それからは、本当の家族と幸せに暮らした。

「子盗み鳥」杉村 1969 / 伝承地域 旭川地方 / 伝承者 杉村キナラブック / 採録年月日 1967年2月18日 / 公開形態 アイヌ語原文対訳

山の中で主人公である人間の男の子が母（らしき女性）と暮らしていた。あるときその女性はいろりの火を吹きながら次のような歌を歌っていた。

「Pasukur tasa pu（鳥と とりかえた プー） / Keraenewa pu（おかしなもんだ プー） / Isown-kasapa pu（獲物 あまりにも多く プー） / Tekka okem yarpa pu（手血であれはてた プー）」

主人公がどうしてそんな歌を歌うのかと尋ねると「自分はカラスで、人間の子であるおまえと自分の子を交換して育てていた」と白状した。私はそいつの髪の毛をつかんで叩きつけ、振り回して外に投げて殺した。自分で歩いて人間の村へ行くと「自分の子だと思って育てていた子が、ある日突然カラスになって飛んで行ってしまった」と言って悲しんでいる家族がいた。自分が実の子であると告げて、それからは本当の家族と幸せに暮らした。

「カラスが姉に化けて自分を育てていた」アイヌ民族博物館 2015 / 伝承地域 非公開 / 伝承者 非公開 / 採録年月日 1982年9月3日 / 公開形態 梗概

主人公である人間の男の子が姉（らしき女性）と暮らしていた。男の子が獲物をとってくると、姉は皮張りをしていた。ある日男の子が窓から家の中を見ると、一羽のカラスがこのような歌を歌っていた。

「paskur tasa pu（カラスと交換して プー） / cikonrok kus pu（持ったために プー） / ison kasapa pu（狩りがうますぎて プー） / a=teke ka pu（私の手も プー） / okemiarka pu（血が出て痛い プー）」

主人公が家に入るともとどおり姉がいてこのように言った。「私はカラスで、人間の子であるあなたをさらってきて育てていたのです。ばれてしまったので私はカラスに

戻って天に帰りますが、あなたは人間なので、どこからかきた人間の女性と結婚し、カラスの神に祈ってください」そう言って大きなカラスになり、鳴きながら飛んで行ってしまったので、ひどく驚いた。それからはカラスが言った通り、人間の女性と結婚して一生を終えた。

最後のデータは、文献上でしか確認できなかった反復句について、バックデータ非公開資料ながら実際に音声を確認することができた貴重な資料である。それによるとこの部分にメロディはなく、リズムカルに言葉をつないでいくという性質のものであることがわかった。

ここまで類似した反復句が各地で自然発生したとは考えられず、採録年代から考えると、もともと十勝地方にあった伝承が道北地方へ、また別ルートとして日高山脈を越え西進していったという2つの伝承経路が想定できる。西進の際に「子供の交換」要素は失われ、「人間の子供をさらって育てる」型への変化が見てとれ、人間の方に身代わりに置かれたカラスの子供が歌った反復句は初期の段階で消滅している。

#### 4-3. 西進ルートの結末変化

さらに大きな問題として、この類型の結末変化があげられる。十勝、旭川地方の結末は、先述の通りカラスが主人公に「叩かれる」「殺される」という悲惨なものであるのに対し、日高地方では「カラスが祀ってくれるようにと主人公に頼んでくる」または「実際に祀られる」という結末になっている。萱野 1988 にそれは顕著に現れており、そこでカラス神が主人公をさらったことを告白すると、怒った主人公に殺されてしまう。しかしその後、主人公はカラス神に請われるままに祀るのである。誘拐という重罪を犯しておきながら祭祀依頼というのはずいぶん虫のいい話に聞こえ、その通りにしてやるということとあいまって、これはどのような規範に基づくのだろうかという疑問が生じるが、アイヌ散文説話においては神の罪をある程度許容するという価値観があり、それが関係しているのではないかと筆者は考える。以下に一例をあげる。

ある人間の夫婦がいた。子供のいないその妻の方を襲った「山すそに住むクマおやじ」が、妻の機転で返り討ちにあい殺される。そのクマ神は妻の夢に人間の姿をして現れ、他のクマ神にけしかけられたために行ったと自らの過ちを認め、許して欲しいと詫げる。妻とその夫は怒りながらも、他の神々も悪かったのだからと言って赦すこととし、「山すそに住むクマおやじ」は以後その夫婦の守り神となったことで子室にも恵まれて幸々に暮らした<sup>(8)</sup>。



この伝承に見られるような、悪い神を悪いままにしておくのは恐ろしいものだから、挽回の機会を与えて自分の守り神にするというケースはアイヌ口承文芸で時に見られるひとつの特色として存在する。しかしこうした機会が与えられるのはどの生物神にもあり得るといっただけではなく、ともすれば実際に人に危害を加えかねない強い力を有する神に正しくその力を発揮してもらうために赦すという意味合いが強く、そこまでの力を有さないカラス神の伝承に筆者はこの救済策を見出していない。よって萱野 1988 は、カラス神の伝承の中では極めて異例の展開をしている例ということになる。

#### 4-4. 結末変化に影響を与えた「人助けと祭祀由来」

日高地方で多く採録されている散文説話の類型に「人助けと祭祀由来」がある。この類型の樹木神伝承については安田 2018 で述べたが、要素の順序が前後したり欠落したりする場合があるものの概ね次のように整理できる。

- I 主人公（人間）が事件に遭遇する。
- II 神が主人公を助ける。
- III 神が（夢などで）主人公に説明して祭祀由来をする。
- IV 主人公の家系では以後その神を祀るようになる。

この類型に属する伝承の中に「神が人の姿になり孤児を育てる」という展開のものがある。その梗概をまとめると次のようになる。

##### (要素 1)

ある人間の子供が主人公で、親（らしき人）に育てられていた。まわりに家がないので比べるものもない環境で育ったものの、ある時主人公はその親（らしき人）の奇妙な行動を目にし、不審に思う。

##### (要素 2)

親（らしき人）は不審に思われたことを察知し、今までの経緯を語る。もともとここには裕福な村があり、立派な長者夫妻の子が主人公なのであった。しかし突然不幸が訪れる。夜襲をかけられたり、伝染病の神がやってきたせいで村が減んでしまう。長者夫婦は死ぬ前に、家の祭壇の神に赤子だった主人公を託して息絶える。

##### (要素 3)

村でたったひとり残された赤子の主人公は泣き続けるが、長者夫婦が祀っていた神々は誰も助けようとしな。そこでひとりの意外な神が名乗りを上げ、人間の姿になり主人公を育てることとなり、今に至った。しかし不審な行動を見られたことをきっかけに、

その神は「もうおまえは大きくなったのだからひとりで生きていける。私は神の国に帰るので、結婚して家を再興しなさい。そして私を祀っておくれ」そう言い置いて神は神の国に帰って行く。

(要素4)

神が言った通り、主人公は結婚して子供をもうけ、子孫を繁栄させる。そして育ててくれた神に感謝の祈りを捧げることを忘れず、一生を終えた。

この要素のうち、下線部分に「人さらい子育て」と共通性が認められるというのは誰しも気づくところであろう。両者がよく似ているために、伝えられていくどこかの段階で混同されてしまったということも十分に考えられ、萱野 1988 で双方の伝承が融合したように見えるのはそうした理由があったからではないかと筆者は考えている。

そのような変化が生じたもうひとつの理由は、北海道西南部の沙流地方においてカラス神が「人助けをする重要な神である」と認識されるに足る伝承が採録されていることと無関係ではないだろう。これは他地域に類話が伝わった例を今のところ見出せていない、この地域固有の伝承である。

ある村に暮らしていたイクレスイェという勇者が、いつも猟をするたびにカラス達に獲物のおすそ分けをしていた。ある晩秋に舟に乗ってひとりで出かけて見たくなり、ある山のふもとに行った。帰る気にならず、ずっとそこにいると、たくさんのカラス達が食べ物を運んで来てくれ、夜になるとイクレスイェの体を覆うようにとまってくれるので餓死も凍死もすることなく冬じゅうをそこで過ごした。春になるとカラスの首領が(人の言葉を発し)教えてくれた。イクレスイェがこの場所に来たくなったのは、山を領有する妖女にかどわかされたせいであり、いつもおすそ分けをしてもらっていたカラスがそんなイクレスイェを守って妖女を滅ぼしたのであった。その後カラスの導きで無事に家族の元に帰ることができた<sup>(9)</sup>。

またこの伝承以外にも、沙流地方ではカラス神が伝承中重要な働きをするものが採録されている。田村 1997 では、主人公が悪い義兄妹に殺されたことをカラス神が義父に知らせに行くというくだりで、散文説話の中に神謡が入れ子構造のようになって語られている。ここでカラス神の知らせがなければ悪事が露見しなかったところからみても、カラス神は物語の鍵を握る重要な役割を担っている。つまり沙流地方はカラス神が人助けをする神であるという意識の色濃い伝承が存在した地域であり、そこに他地域由来の「人さらい子育て」が伝えられたことが、くだんの結末変化が起きたことに関係しているのではないだろうか。

#### 4-5. 反復句消失以後

沙流地方に伝わった「人さらい子育て」はさらに変化し、反復句は失われる。それは即ち主人公が身内と思っていた人の正体がカラスであるということに気づききっかけが消失することを意味するが、そうはならずそこに新たな要素が出現したように見える。

「カラスに育てられた男の物語」奥田 1990 / 伝承地域 沙流 / 伝承者 上田トシ / 採録年月日 1987年9月 / 公開形態 アイヌ語原文対訳

主人公である人間の若い男が、母（らしき女性）と暮らしていた。幸せに暮らしていたが、母は時々大事にしている漆塗りの鉢の中のものをこっそり食べていた。ある日母が出かけている間に行器の中を見ると、そこには糞が入っていた<sup>(10)</sup>。驚いたことに、母は糞を食べていたのだ。主人公は母は帰ってきても知らないふりをしていたが、その夜に母はこう言った。「私はおまえを人間のところからさらって育ててきた。でももう年老いたので神の国に帰ることにするから、おまえは元の家族の元に帰りなさい」。翌日、母と思っていた人はカラスになって飛んでいってしまった。そこで男は自分の村に戻り、本当の家族と再会して元通りに暮らすこととなった。それから母と思っていたカラスを祀りながら暮らしたのであった。

この例では、主人公がカラスにさらわれたことに対する怒りの感情を読み取ることはできない。そこでの主人公は依頼ではなく自発的にカラスを祭祀し、母としていつまでも慕っている。これは解題で『主人公が動物神に育てられる——主人公が動物神の秘密を見る——動物神が真相を語って神の世界に帰る——主人公が人間の世界に帰る——動物神の加護のもとに主人公の一族が幸福に暮らす』という一つの典型的な話型をとっている（奥田1990）」と説明されている通り、ストーリー的には筆者が前述した「神が人の姿になり孤児を育てる」話とはほぼ一致する。つまり「人さらい」要素を除いては「人助けと祭祀由来」に属する話に移行しているという印象を受けるのである。

さらに筆者自身が調査した沙流地方のさらに西側、つまりこの伝承の発祥地域と目される十勝地方からすると、沙流川流域を経由して西進した先に位置する鶴川地方の採録例をここに紹介することにした。

「カラスに育てられた女の子」アイヌ民族博物館収蔵音声資料 / 伝承地域 鶴川 / 伝承者 新井田セイノ / 採録年月日 1995年4月9日 / 未発表資料

主人公である人間の女の子が、おじいさん（らしき老人）に育てられていた。おじいさんが肉や魚を持ってくるのでそれを食べて暮らし、夜になると外で歌や踊りをする声

が聞こえていたが、おじいさんに絶対行くなと言われていた。ある夜寝ていると、おじいさんは行器のふたを取って何かを食べていた。翌日おじいさんが留守の間に行器の中を見ると、そこには糞が入っていた。主人公はおじいさんが帰ってきたのでその話をしただけにすると、おじいさんはこう言った。「ここには以前村があり、おまえの父と母もいた。しかし夜襲をかけられ皆殺されてしまった。祭壇に隠されたおまえだけが生き残ってさんざん泣いていたので、私が人間の姿となり今まで育てていたのだ。なぜか自分は糞が好きなのだが、それ食べているところを見られたからにはもう一緒には暮らせない。自分はカラスに戻るが、夜に何かが騒いでいるところには絶対に行くな」そういっておじいさんは一羽のカラスになり、どこかへ飛んで行ってしまった。女の子はそれを後悔しながらひとりで暮らしていたが、また歌や踊りの声が聞こえてきたので我慢できなくなり、湿地に行つてその仲間に入って歌い踊り楽しんだ。そして水を飲もうとして水鏡に映つた自分を見ると、自分は泥水の中のカエルになってしまっていた。歌い踊るような声はカエルだったのだが、おじいさん以外の人間を見たことがなかったためにすっかり化かされてしまい、もうどうしようもなくカエルとして生きて行くこととなった。

さてこの2つの伝承はカラスとばれてしまう理由が共通しており、全体の構成も似ているので、沙流地方から鶴川地方に伝わった伝承であると考えられる。後者では「人さらい」要素が見られず、ほぼ「神が人の姿になり孤児を育てる」類型に完全に移行したように見えるが、今までどの地域にも見られなかった主人公がカエルになるという結末が現れており、良い話というよりは不条理な話という印象を受ける。

「カラスに育てられた男の物語」の上田トシ氏と「カラスに育てられた女の子」の新井田セイノ氏は同世代で生活体験地もそれほど離れておらず、晩年親交があった。しかしこの伝承が両者間の直接的なやりとりで伝わった可能性については否定される。新井田氏はこの伝承の採録時ほとんど他地域の伝承者との交流はなく、上田氏の話題を出した筆者に対して「その人に会ってみたい」と語っていた。その言葉を受けて実際に二人が会う機会を筆者が設けたのはこの調査の数ヶ月後<sup>(11)</sup>である。よつてこの伝承は二人の伝承者以外にもこの伝承を伝えた氏名未詳の人が少なからず存在していたはずであり、それでも確実に地域を超えて伝えられた要素が、両伝承の関係性を雄弁に物語っている例ということになるだろう。

「人さらい子育て」とそれに関連する伝承の要素比較表にし(表1)、網かけ部分に注目すると、左側の要素「人さらい子育て」から右側の要素「神が人の姿になり孤児を育てる」に徐々に移行していく様子をはっきりと見てとれる。

表 1

「カラスと親子」(十勝)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい (交換) 人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明、祭祀依頼
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

「カラスと赤ん坊」1961 (沙流)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい (交換) 人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明、祭祀依頼
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

「子盗み鳥」1967 (旭川)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい (交換) 人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明、祭祀依頼
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

「カラスが姉に化けて自分を育てていた」1982 (非公開)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明、祭祀依頼
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

「カラスに育てられた男の物語」1987 (沙流)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

「カラスに育てられた女の子」1995 (鶴川)

〈人さらい子育て要素〉	〈人助け祭祀由来要素〉
	(1. 主人公が事件に遭遇する)
1. カラスが主人公をさらい人間に化けて育てる	2. (生物) 神が主人公を助ける
2. 主人公にばれて罰を受ける	3. 事件後、神が主人公に説明して立ち去る
	4. 主人公の家系では以後その神を祀るようになる

## 5. 考察

伝承が伝わると様々な要因で内容が変化する場合があるが、本稿で詳しく取り上げた「人さらい子育て」については、元来狡猾なカラスの伝承であったものが、カラスが神として重要な役割をする伝承が存在する地域に伝わったことで、似た要素を持つ「神が人の姿になり孤児を育てる」要素を取り込み、徐々に良いカラス神の話になっていった。これはカラスが神であるというアイヌ文化の特色のなかで起こり得た変化であり、アイヌの世界観を逸脱するものではないのと同時に、近隣文化の日本民話「生物はあくまでも生物」という世界観の中では起こり得ない変化であったともいえる。両文化には類似した部分があり、民話や伝承という分野でも、ともすれば世界観ごと混同してしまいがちだが、類型ごとの比較を積み重ねて行く中で、根本的な世界観の相違からくる相容れない部分を今後明らかにしていかなければならないだろう。そして今回ひとつの類型を追うなかで、在来の要素を取り込みつつ不断に変化を続けていくという、伝承が本来持つ性質を垣間見たように思われてならなかった。

### おわりに

最後に取り上げた鶴川地方の伝承は、1995年に筆者自身が人生で初めてアイヌ語話者から聞き取った散文説話であり、その伝承者新井田セイノ氏は、アイヌ語から徐々に日本語だけの語りになってしまったことを調査後にしきりと詫びておられた。しかし本稿で見た通り、その内容はまごうことなきアイヌ散文説話の形式をなした第一次資料であり、日本語語りという点が何らかの伝承の資料的価値を下げるものではない。そしてこの調査以降、伝承者の減少でアイヌ語の調査自体が難しいものとなっていき、結果この伝承が「人さらい子育て」が変化しつつ長い旅をしてきた終着点のひとつとなったように筆者には見えている。20年以上の時間が経過しての報告は遅きに失した感があり、氏もこの世を去られて久しいが、改めて貴重な資料を語り残して下さったことに敬意を表したい。

本稿の分析は伝承の採録年を基準にするものであって、伝承者が人生のどの時点でこの伝承を耳にしたかを特定する手段を筆者は持たず、それが子供時代であったのかその後のことなのか不明という他はない。しかしアイヌ口承文芸を、国や民族の枠を越えて広い視野で捉える作業が必要なるようにして、アイヌ文化の中では伝承がどのような経路で伝わったのかという検証も今後必要になってくると思われ、本稿の手法が将来的にその一助となることを願うのみである。

### 附記

本稿は2018年6月3日に関西福祉科学大学において開催された日本口承文芸学会第42回大会の研究発表前半部分を骨子とし加筆修正したものである。後半部分については稿を

改めることにしたい。また発表後に樺太アイヌの伝承について当学会員の北原次郎太氏、坂口諒氏にご教示いただいた。樺太アイヌの言葉と文化について筆者は不勉強なため詳しく本稿で取り上げることはできなかったが、当該地域でも「人さらい子育て」に類する伝承が1980年代に採録されていることを知った。この伝承には西進ルートのみならず、旭川地方を經由して北へ展開するルートが存在していた可能性が示唆される。また北海道でハシプトガラスとハシボソガラスがセットとなり語られる事例があるのに対して、樺太ではハシボソガラスとワタリガラスがセットになる伝承例が確認でき、カラスの生息域と相まって興味深かった。

## 注

- (1) バチェラー 1901 にコクマルガラスについての言及があるが、この2種についてはバチェラーを含めた文献を精査してもアイヌ語名が採録されたという記録はみられないことから、著者が生物学的知識を述べたという以上のものではないだろう。
- (2) バチェラー 1925 ではこの部分にヨタカの和名があてられている。しかしこの記録以外にヨタカの名がみえる例はなく、ヨタカは通常別のアイヌ語名で記録されていることからみて、筆者は *citeskop* について種名未詳の立場をとっている。
- (3) 中川 1997 など。
- (4) 「ワシ神の化身と人間の娘」(アイヌ民族博物館 2017) では、ワシ神と人間の娘が結婚したことにより、その家系では儀式の際に祭主を務める家長の座に神がいることとなり「人が神を祀る」という人間界と神界の間にある既存のルールに沿うことができず、そのため嫁のしゅうと、そしてその後は半分人間の側にルーツを持つ長男が儀式をおこなったということが取って代わって詳細に語られている。
- (5) 同話は松元 1929、吉田 1965 にも採録されている。
- (6) 更科は 1977 では同話を引用した上で「これは和人から伝わった話のように思われる節もある」と、その違和感に言及している。
- (7) 松元 1929。梗概は筆者による。以下の梗概も全て同様である。
- (8) 「シナ皮を背負ったクマ」『アイヌと自然デジタル図鑑』アイヌ民族博物館 2015 年／伝承地域 静内／伝承者 織田ステノ／採録年月日 1980 年 5 月 28 日、1981 年 8 月 21 日／公開形態 梗概
- (9) 「イクレスイェとカラス神」『アイヌ語アーカイブ』アイヌ民族博物館 2018 年／伝承地域 沙流地方バナコリ／伝承者 川上まつ子／採録年月日 1984 年 6 月 2 日／公開形態 アイヌ語原文対訳。萱野 1974 にも所収。この音声聞いたことが川上氏の語りの元となった可能性がある。
- (10) どのカラス類にも好んで糞を食べるという習性はなく、これはハシプトガラスのアイヌ語名「シエバシクル(糞食いガラス)」から派生した架空の行動と考えられる。ちなみに沙

流地方、鶴川地方どちらの伝承も「バシクル（カラス）」と語られるのみで、種名にあたるものは出てこない。カラスの種名問題については稿を改めて論じることとしたい。

(11) 1995年9月10日、アイヌ民族博物館主催のアイヌ文化教室「アイヌ口承文芸鑑賞会」。

## 引用参考文献

- ジョン・バチェラー『アイヌの炉辺物語』1925 富貴堂書房 (John・batchelor『ainu fireside stories』1924 Kyobunkan)
- 松元竹二『朝鮮・台湾・アイヌ童話集』1929 近代社
- 金田一京助『岩波文庫 アイヌ叙事詩 ユーカラ』1936 岩波書店
- 吉田巖『愛郷譚叢 古老談話記録 東北海道アイヌ古事風土記資料 帯広社会教育叢書 No.3』1957 帯広市教育委員会
- 吉田巖『アイヌ童話 帯広市社会教育叢書 No.10』1965 帯広市教育委員会
- 更科源蔵『アイヌ民話集』1963 北書房
- 杉村キナラブック他『キナラブック・ユーカラ集』1969 旭川叢書
- 萱野茂『カムイユカラと昔話』1988 小学館
- 萱野茂『ウエベケレ集大成 第1巻』1974 アルドオ
- 奥田統己「アイヌ口承文芸(1) 上田トシさん口演「カラスに育てられた男の物語」『札幌学院大学人文学会紀要 第47号』1990 札幌学院大学
- 小澤俊夫『昔話のコスモロジー ひとと動物の婚姻譚』1994 講談社
- 田村すず子『アイヌ語音声資料十一川上まつ子さんの昔話と神謡—(ペナコリ)』1997 早稲田大学語学教育研究所
- 中川裕『平凡社ライブラリー 190 アイヌの物語世界』1997 平凡社
- 中村とも子「日本の異類婚姻譚における人と動物のあいだの距離—「変身」の視点から—」2010『口承文芸研究第33号』日本口承文芸学会
- 稲田浩二・稲田和子『日本昔話ハンドブック』2010 三省堂
- 關敬吾『日本昔話の型 付モチーフ・話型・分類』2013
- 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町) 調査報告書1~3』2015 国立大学法人千葉大学
- アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブス(web)』2007-2008 アイヌ民族博物館
- アイヌ民族博物館『アイヌと自然デジタル図鑑(web)』2015 アイヌ民族博物館
- アイヌ民族博物館『上田トシの民話 1~3』2015 アイヌ民族博物館
- アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブ(web)』2017 アイヌ民族博物館
- 安田千夏「北海道アイヌ口承文芸『人助け樹木神』について」『口承文芸研究第41号』2018 日本口承文芸学会

(やすだ・ちか／(公財)アイヌ民族文化財団)